The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代語における「名詞型助数詞」の記述的研究
Author(s)	東条, 佳奈
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/55679
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　東条　佳奈　）	
論文題名	現代語における「名詞型助数詞」の記述的研究

本研究は、数詞に続く名詞を「名詞型助数詞」と呼び、現代語におけるこれらの実態を調査し、類型化した上で、それらの特徴を記述したものである。

助数詞は文法論的・認知意味論的・語彙論的・心理学的など多くのアプローチにより研究が重ねられてきているが、これまでの研究はもっぱら、「1本」における「-本」や「1枚」における「-枚」などの、数詞と切り離した時に独立して用いることができない助数詞を対象にしたものであったといえる。「1世帯」の「世帯」や「1大学」の「大学」のような、数詞と切り離して独立して用いることができる「名詞と同じ形態をもつ」助数詞は、「セット」や「パック」のように、新たに助数詞として取り入れられたものを含んでおり、これらの実態を把握することは、現代語における助数詞の変化を捉えることにもつながると思われる。

本論文は序章・終章のほか、6章からなる。

序章では、研究の背景と目的、助数詞の機能と本研究の立場、扱う資料、本論文の構成について述べた。

第1章にて名詞型助数詞の実態調査とその結果、新たな分類方法の提示と類型化を行い、第2章・第3章では提示した類型の特徴を明確にするための新たな調査を行った。第4章～第6章ではそれぞれの類型について、大局的な分析や個別の語に注目して用法を分析した。以下に成果の概要をまとめる。

第1章では、『CD-毎日新聞データ集』より、1991年一年分の新聞データを用いて、洋数字に続く語例を取り出し、国立国語研究所（2004）『分類語彙表―増補改訂版―』における分類番号と照合し、378種の名詞型助数詞を取り出した。次に、先行研究である成田徹男（1990）「名詞と同形の助数詞」（『都大論究27』）の分類を検討した上で、「数え上げることができるか、できないか」という「可付番性」の有無の区別を加え、実態をカバーしうる客観的な分類を提案した。この分類により、名詞型助数詞には、可付番性の有無によって区別される二つのタイプがあるということがわかった。可付番性のある語は「何項目」のように不定数である「何(なん)」を冠して用いることが可能な、前に来る数を制限しないタイプであり、典型的な助数詞と同じ性質を備えるものである。ここには既に助数詞として浸透しているもの、副詞的位置に生起できるものが含まれる。これらの元になる名詞が属する意味領域は、抽象的な関係を示すものが多いため、成田（1990）の指摘通り、従来の日本語助数詞体系で貧弱である領域を補うために用いられると考えられる。これらの名詞は、数詞を付けることで助数詞として用いることができる、助数詞に準じる存在の名詞であり、いわば「準助数詞」と呼ぶべきものである。一方、可付番性のない語は、「何(なん)」を冠することができず、前に来る数を制限するタイプであり、「3青年」「2女性」のように、人物や機関などの具体的な名詞を助数詞化しているものが多く、「1青年、2青年…」のように数を積み上げて用いることができない。これらはもともと名詞であるものを、限られた場面でのみ、数詞を付けて臨時的に助数詞の形をとったもので、擬似的に助数詞の形を模していることから「擬似助数詞」と呼ぶべきものである。また、こうした可付番性の有無という分類基準は、先行研究の分類をも適切に解釈する観点となることを示した。さらに名詞型助数詞にはこれらのほか、「さら」や「はこ」のように容器・形状によってある物の量を測る役割をもつ、名詞的な側面が希薄である「容器型助数詞」と呼ぶべきものが含まれる。

第2章では、提案した類型である「準助数詞」「擬似助数詞」について、それぞれの語例の前につく数字のバリエーションや、用例数に差があるのかを量的かつ経年的に調査した。その結果、準助数詞では、時代が下るに従って用例数が増えているのに対し、擬似助数詞の用例の現れ方はある特定の年に集中するなど、使用が定着していないことがわかり、臨時的なその場限りの用法である擬似助数詞の特徴を捉えた結果となった。さらに準助数詞では、安定した傾向をみせる語例のほか、増加傾向にある語例として、新聞でよく話題に上がるスポーツ関連の語や、「店舗」のように、他の助数詞との使い分けがあることが先行研究で示されている語が見られた。需要があるために用いられるという準助数詞の特徴を示す傾向だといえる。また、準助数詞と擬似助数詞で分布が相補的となっていない意味分野について、両者の差異を検討した結果、準助数詞は初めから可付番性を獲得しており、名詞から擬似助数詞を経て準助

数詞となるような移行関係にある可能性は低いことを示した。

第3章では構文的な観点からの分析を行っている。数量詞構文の型として多くの研究で取り上げられる「定番四形式」（岩田2013『日本語数量詞の諸相―数量詞は数を表すコトバか―』）に「数詞＋名詞型助数詞」を当てはめた場合に、どのような分布を示すのかについて調査した。その結果、名詞型助数詞はNQC型、N/QC型に多く現れること、特に擬似助数詞はこの形式に限って顕著に現れることを示した。NQC型・N/QC型はいずれも、先行詞となる名詞の総数量をまとめて示す機能（宇都宮弘章1995「数量詞の機能と遊離条件」『共立国際文化』7）をもつと指摘されており、実例もその機能での用法がほとんどであった。岩田（2013）は「異質性・同質性」という概念を用いて、Q/NC型には先行詞Nを底とした質的情報に重点があるため、同質な集合物しか許容せず、NQC型は、同質・異質な集合物ともに許容し、さらにN/QC型ではNQC型よりもはっきりとQに重点が置かれ、積極的にNの異質性を求めることを指摘する。本稿では、岩田の指摘する「Nの集合が自由」という点が、名詞型助数詞、特に擬似助数詞にN/QC型が多かった要因に繋がること、さらに、N/QC型をとる名詞型助数詞は、「A, B, Cの3容疑者」のように、先行詞の数量（3）だけでなく、それらがどのような属性であるかというカテゴリーをまとめて同時に示し（容疑者）、異質性（A, B, C）を持ちながら同質性（容疑者）をも表現することが可能であり、特に擬似助数詞は細かく属性規定ができるために、これらの形式に偏る可能性があることを示した。さらにNQC型では、「再試合が2試合ある」のような、Nという同質のものがいくつあるかをQが示す表現となるため、Q部の名詞は同質性も異質性も表さず、単にQとして数量を示す表現となること、Q/NC型の語例では「種類」や「分野」「品目」のような下位類を示す名詞が多く見られ、Q部にくる名詞は異質性を表していることを指摘し、擬似助数詞がQ/NC型を取ることができない理由として、これらが属性規定を行い、Nに同質性を付与してしまうためである可能性を示した。3章の結果から、典型的な助数詞が貧弱である範囲をカバーする「準助数詞」に対し、擬似助数詞の利点は、「先行詞の数量だけでなく、それらがどのような属性であるかというカテゴリーをまとめて同時に示す」ことであると考えられた。

第4章では、擬似助数詞についての分析を行った。擬似助数詞は数詞と名詞が臨時的に結びつく語であることから、ある特定の語例に定めず、大局的な見方で成立条件を検討した。「原理的には、名詞はすべて潜在的に助数詞として使われる可能性をもっているのではないか」という成田（1990）の指摘をふまえ、擬似助数詞における、数と名詞の結びつきの制限について調査を行った。その結果、数詞と結びつきやすい語の特徴として、職業や役割、組織における「長」などの位置づけを示す語であること、漢語であること、俗語的なものよりは文章語的なものであることなどを指摘した。また、これらの条件を満たさない場合も、特殊な用法となる数詞「一」との結びつきは見られることを述べた。これに対して、和語や複合語、特定読みができないものは数詞と結びつきにくいことを指摘した。複合語においては「*2東芝社員」はないが「東芝2社員」は成立する、というように、構成要素の主要部の直前に数詞が入り込む一方で、「原子力発電所」のように、複合語としての結合が強固であるものの場合には、数詞は「5原子力発電所」のように前に来ることを示した。この点については、複合語の結合度をはかるなどして、さらに調査をしていく必要がある。加えて、擬似助数詞がとる構文が特定の読みを要求するため、不特定の読みしかできない場合には数詞と結びつくことができないことを述べた。

第5章、第6章は、個別の準助数詞である「セット」に焦点をあて、用法を記述した。

第5章では、複数の資料を用いて、類義の準助数詞である「組」との比較から、「セット」の用法について論じた。「セット」は「組」と同様、集合物を数える助数詞であるが、その集合を構成する個体同士が「役割」という抽象的な結びつきをもつために、個体の形状の大小や有無を問わず、自由な用法を獲得することができる可能性を示した。名詞型助数詞は、名詞を用いて対象を数えることにより、表現のバリエーションが生じ、さらに何を指し示しているのかが文脈の中で分かりやすくなるというメリットがある。助数詞としての機能を獲得した名詞「セット」が、話者が「まとまり」として認識したいものを一つの集合物として数え上げることができることは、このような名詞型助数詞の特色とも矛盾しないと思われた。

第6章では、こうした「セット」が助数詞として使われ始めた時期について、通時的に検証した。物を組み合わせて売る「セット」という概念が「常識」として浸透したと思われる1960年前後から、すぐに大きな数字と結びつく例が見られたため、名詞からすぐに「準助数詞」として使用されていたことが伺えた。このことは、「セット」が「役割」という抽象的なまとまりによって個体同士を結びつける語であり、「組」に比べて柔軟な用法をもつという結果とも関わると考えられた。以上の結果は、名詞が助数詞体系に取り入れられる際には、擬似助数詞を経ずに準助数詞として用いられる可能性の裏付けになったといえる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　東　条　佳　奈　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	石　井　正　彦
	副 査	大阪大学　教授	渋　谷　勝　己
	副 査	大阪大学　教授	青　木　直　子

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　現代語における「名詞型助数詞」の記述的研究

学位申請者　東条　佳奈

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　石　井　正　彦

副査　大阪大学教授　　渋　谷　勝　己

副査　大阪大学教授　　青　木　直　子

【論文内容の要旨】

本論文は、数詞と切り離して「独立して用いることができる」「名詞と同じ形態」の助数詞を「名詞型助数詞」と呼び、それらを主に新聞コーパスを利用した大量調査によって収集・整理し、その用法や特徴を明らかにしようとしたものである。論文の本体は、序章、本論６章、終章から構成され、他に参考文献を付する。全体の分量は、Ａ４判 122 頁、400 字詰め原稿用紙換算約 450 枚である。以下、本論文の構成に従ってその要旨を記す。

序章では、従来の助数詞研究を概観した上で、本論文の目的を、本来の助数詞体系に変化を及ぼす可能性のある名詞型助数詞の語例を収集し、現在どのような名詞が助数詞として用いられるかを整理した上で、それらがどのような用法や役割を担うために助数詞体系に取り入れられているのかを考察し、助数詞として用いられる名詞の様相を明らかにすること、と定める。

第１章では、新聞一年分のコーパスから 378 種の名詞型助数詞を抽出し、これらを「可付番性の有無」（前接する数に制限があるかないか）という独自の観点から、「１ページ、２ページ、……」などと数を積み上げて数えられる「準助数詞」と、「１閣僚、２閣僚、……」などとは数えられない＝数を自由に入れ替えられない「擬似助数詞」とに分類した。また、これらは意味分野において、準助数詞が「抽象的な事柄を表す名詞」に多く、擬似助数詞が「人物や機関など具体性の高い名詞」に多いという相補的な分布をなすことを明らかにした。

第２章では、準助数詞と擬似助数詞とで結びつく数詞のバリエーションに差があることを、戦後 60 年分の通時的な新聞コーパスを用いた調査によって確認した。準助数詞には時代が下るに従って数詞の異なりが増えるものが明らかに多いが、擬似助数詞にはそうした数詞の増加傾向を示すものは少ないこと、ただし、準助数詞は当初から可付番性を獲得している可能性が高く、名詞から擬似助数詞を経て準助数詞となるような移行関係にある可能性は低いことを述べた。

第３章では、構文的な観点から準助数詞と擬似助数詞の特徴を検討すべく、数量詞構文の型となる「定番四形式」に沿って名詞型助数詞の構文を調査し、これらがＮＱＣ型、ＮノＱＣ型に多く現れ、特に擬似助数詞はこの形式に限って顕著に現れることを明らかにした。また、このことから、典型的な助数詞が貧弱である範囲をカバーする準助数詞に対し、擬似助数詞の利点は「先行詞の数量だけでなく、それらがどのような属性であるかというカテゴリーをまとめて同時に示す」ところにあることを示した。

第４章では、擬似助数詞の成立条件を検討すべく、擬似助数詞の用法における数と名詞の結びつきの制限について調査を行った。その結果、擬似助数詞になりやすいものには、職業や役割を表す名詞、漢語や文章語的な名詞などが挙げられた。これに対して、和語や複合語、特定読みができない名詞などは擬似助数詞になりにくいことを指摘した。

第５・６章は、個別の準助数詞である「セット」に焦点をあて、用法を記述した。第５章では、複数の資料を用いて、類義の準助数詞である「組」との比較から、「セット」の用法について論じた。「セット」は「組」と同様、集合物を数える助数詞であるが、その集合を構成する個体どうしが〈役割〉という抽象的な結びつきをもつために、個体の形状の大小や有無を問わず、自由な用法を獲得することができる可能性を示した。

第６章では、「セット」が助数詞として使われ始めた時期について通時的に検討し、物を組み合わせて売る「セット」という概念が“常識”として浸透した 1960 年前後からすでに大きな数字と結びつく例が見られることから、「セット」が名詞からただちに準助数詞として派生・使用されたものと推定し、名詞が助数詞体系に取り入れられる際には、擬似助数詞を経ることなく準助数詞として用いられる可能性が高いことを改めて提示した。

終章では、各章のまとめと、今後の課題について述べた。

【論文審査の結果の要旨】

従来の助数詞研究においては、「-個」「-枚」「-冊」など、数詞と切り離した時に「独立して用いることができない」典型的な助数詞（狭義の助数詞）に関心が注がれ、「世帯」「株」など、数詞と切り離して「独立して用いることができる」助数詞は、割合としては前者より多いとされるものの、典型的なものを含まないために、研究の対象とされることが少なかった。本論文の最大の功績は、この従来注目されることの少なかった「名詞型助数詞」に光を当て、それらを「可付番性の有無」という独自の観点によって分類し、「準助数詞」と「擬似助数詞」という新しい語類を発見・提示したところにある。この分類が適切であること、すなわち、準助数詞と擬似助数詞という語類（の区別）が明らかに存在することは、意味分野における両者の分布が相補的であるという語彙論的な分析、結びつく数詞のバリエーションとその増加傾向において両者に明らかな差があるという通時的な分析、数量詞構文の「定番四形式」の成立可能性において両者に明らかな違いが認められるという文法的な分析によって多角的に検証されており、さらに、いずれの分析も各種コーパスを用いた大規模な計量調査によって結論の精度・信頼性が高められており、十分な説得力を持つものである。名詞型助数詞が準助数詞と擬似助数詞とに分かれるとする本論文の主張は、今後の助数詞研究において常に参照される知見となることが見込まれる。

ただし、本論文には、克服すべき課題も残されている。それは、本論文の最も重要な概念である「可付番性」の内実が不明なことである。本論文では、可付番性を「数を積み上げて数えられるか」あるいは「『何～』と言えるか」といった現象としてとらえ、もっぱら準助数詞か擬似助数詞かを判別するテストフレームとして使うにとどまっている。上述した両者の語彙論的・文法論的な差異も、恐らく可付番性のもたらす現象であって可付番性そのものではない。可付番性を「積み上げて数えられること」ではなく、「積み上げて数えることを可能にする性質」ととらえ、その内実を解明していくことが必要であろう。それにより、準助数詞と擬似助数詞との違いをより本質的に把握し、さらには、本来の助数詞や、擬似助数詞にもならない多くの名詞との違いも追究できるのではないか。名詞型助数詞の研究は、可付番性を鍵として、助数詞論から名詞論へと展開していく余地がある。

とはいえ、本論文が、上述したように、名詞型助数詞の研究に重要な新知見を加えたことは明らかであり、上の課題も今後の研究の方向性を示すものでこそあれ、その価値を損なうというものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。